

---

# 奇妙な一週間。

CACAONOVEL12

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇妙な一週間。

### 【Zコード】

Z5592Z

### 【作者名】

CACAO NOVEL12

### 【あらすじ】

主人公・佐伯 静枝はとある理由で突然死し、幽体離脱してしまう。

神だと名乗る人物に出会い、その人物から、

「お前はあと一週間以内にある事をやり遂げねば、そのまま死ぬ」と告げられる。

静枝はその役目を果たそうと懸命に努力する。

「だつてまで死にたくないもん！」

その途中で、家族や友達の秘密・本当の気持ちを知つてしまつ。

はたして、 静枝は役目を果たせるのか？

短いですが、 最後までお楽しみください。

苦しい。

お父さんが私の名前を大声で呼んでいる。

お母さんは涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃ。

お兄ちゃんは「頑張れ」と叫んでいる。

お姉ちゃんは意味不明な言葉で私を呼んでいるようだ。

苦しい。

痛い。

私は痛みと苦しみの中、そのまま意識を失った。

気がついた。

私は病院のベッドに寝かされている。  
寝ていたようだ。

と。

自己紹介がまだだった。

私の名前は「佐伯 静枝」

12才の小学6年生だ。

どういう訳か知らないが、私は病院のベッドの上で寝ている。  
体が重い。

疲れているのかな？

重い体を起こして立ち上がった。

この部屋は個室のようだ。

看護師さんが入ってきた。

「あ、あの・・・」

小さい声ではあったが、この小さい部屋の中だ。

それに、この部屋には私と看護師さんしかいない。

ところが、この看護師さんは私の事を無視した。

？？？？

感じ悪いな。

舌打ちしたい気分ではあったが、ここは堪えておいた。

看護師さんは、しばらくドアの前で立っていた。

急に泣き出した。

え？？？？

なんで泣いてんの？

私はベッドの反対側の隅っこにいた。

看護師さんは、私に気づかないのか、そのままベッドに向かって歩きだした。

ベッドに向かつたということは。

私がベッドで寝ていた事は知っていた。

看護師さんだし。

私は病気か事故で入院しているのか？

私は改めて、自分の寝ていたベッドを見つめた。

すると、ある衝撃的な事実が判明した。

私の寝てたベッドに、

誰かが寝ている。

看護師さんは、その誰かの顔を見つめていた。

誰なんだろう？

知りたい。

もしかしたら、ショタコンでロリコンの変態かも。

そうだとしたら、許せない。

でも、上に寝ていたのは私。

て事は、間違えてその誰かの上に寝ていた私の方が悪いということになる。

そんなの恥ずかしくて言えない。

看護師さんは、しばらくその人の顔を見ていた。

そして、急にその人の腕から点滴を外した。

さつきは気付かなかつたが、この人はたくさんの点滴をしていたようだ。

看護師さんは、その一つ一つを丁寧に外していくつた。

ゆつくり、ゆつくりと。

私はその誰かの細い腕を見て、確信した。

大人じゃない。

大人の女にしては細すぎる。

見た目からして男ではない。

とすると。

小学生の女の子と思うべきか。

点滴を外し終えた頃、看護師さんの目から涙がドバっと溢れた。

「どうしたんですか？」

と、声を掛けた見たものの。

看護師さんはガン無視。

本当に感じ悪い。

ガラッ。

またドアが開いた。

今度入ってきたのは先生と・・・。

「え？」

お父さん、お母さん、お兄ちゃんに、お姉ちゃんまで。

「みんな？なんでここにいるの？」

私の胸では疑問が殺到していた。

なんと！

家族までもがガン無視。

みんな、目が真っ赤に腫れ上がっている。

頬と唇が震えている。

「ねえ、どうしたの？」

お父さんに触れてみた。

でも、触れる前にスルーされた。  
なんで？

みんな、私という存在を無視している。

先生が急に口を開いた。

「誠に申し訳ありません。

我々も最善を尽しましたが・・・。

手遅れでした。

娘さんは、御亡くなりになられました

娘？

亡くなつた？

「本人は今日の午前6時に亡くなつておりました。  
その為、点滴を外させていただきました」

それで・・・。

看護師さん、死んだ人の点滴外すの辛かつたろうな。  
でも・・・。

アレ？

私、死んだ人の上で寝てたの？

考えただけで背筋がぞぞお～つとした。

てか娘つて何？

私もお姉ちゃんも生きてるよ。

それに家、女はお母さんとお姉ちゃんと私。  
この三人以外つてことは・・・。

隠し子？！

てか、なんでみんな驚かないの？！

初めて知つた新事実に私は興奮した。

私の妹かお姉ちゃんに当たるばず！

私はみんなの目を無視して隠し子（？）の顔を見た。  
心臓が止まるかと思つた。

ベッドで寝ていたのは、隠し子なんかじゃない。

私  
だ  
つ  
た。

## はじめまして神

??????

なんで私が死んでんの?  
ん??

もしかたら私って。。。

アレかな?

ほら、あの。。。

お笑い芸人の双子のギャグの  
「ユウタイリダツ」

つてヤツ。

そつか。。。

私って天才かも!

私、なんやかんやで死んじゃって、それからなんやかんやで幽体離  
脱したんだ。

でも・・・なんで?

「ようやく気が付いたようだな」

変な嗄れた声が聞こえた。

後ろを振り返つてみた。

そこには。

巨大なオッサンが立つていた。

髪は真っ白で、髭も同様。

あとふつとい眉毛も。

服はギリシャ神話の人の服。。。

簡単に言えば、「走れメロス」の服の長いバージョン。

で。

そのオッサンは威厳たっぷりに言つた。

「儂は神だ」

「え」

変なオッサンは片方の肩をピクリと動かした。

一  
驚かんのか?  
」

「ボッサンも、その夢な『スアレ』ぐ脱したほ」  
かしこも

私は即答した

ス、サンではない！

モニシシれし「

心にとまつばを向いた

四百一

ムサシノノリ

「 せうへ せうへ 」

？」

オッサン・・・ええい！

神は私のくちやくちや音と鰯の臭い匂いに反応した。

「それはなんじや？」

一

おいしー！！

私は嫌味たゞぶりに言つた

一  
く  
れ  
」

私のお願ひ聞いて

うつ下りやせ

あさひ方言

「ま」

私は約束通りに鰐を渡した。

神は頷きながら、豪快に一口でパクリと口に入れた。  
「ボリツ。ボリツ。ボリツ。ボリツ。」

「うむ・・・。

それでは聞こえではないか

「私、なんでこうなつてんの?」

「うむ。

それはだな・・・」

「クリ。

「今は言えん

「ええ~」

「まあ今度言おう。

それより貴様には、重大な使命がある

「重大な使命?」

「うむ。

ある5つのものを探して欲しい

「ある5つのもの?」

私は聞き返さずにはいられなかつた。

「それはじやな。

1つは愛する者の為に書かれたもの。

2つは幸せにする為に歌われたもの。

3つは癒す為に送られたもの。

4つは伝える為に残されたもの。

5つは仲直りの為に作られたもの

なんか凄い。

「これを見つけさえすれば、貴様は生き返ることができる

「ええ?!

「ホ、ほんと?」

「無論じや。

その頭の輪を見ろ

私は言われるがままに自分の頭の上を見た。

黄色い輪がピカピカしてた。

「ねえ、これって・・・」

「うむ。

死者の輪じや 「

え～？

天使の輪じやないの？

「それが貴様のタイムコマッシュトを示す

「タ、タイムコマッシュト。」

「うむ。

その輪はまつ黄色である「ひ」。

その輪がくすくすめばくすむ「ほ」、貴様のタイムコマッシュトが迫つているところ「じ」と「じ」や

「・・・・・・・・」

「1週間以内に5つのものを探さねば、貴様はそのまま死ぬ

「は？ 嘘お」

「ホントじや。

それよりほれ、急がんと時間が無くなるや」

「ええ？」

「それではさうじや」

「ちょっと・・・待つて！」

神は消えていった。

「嘘・・・」

私にはやるべや」とがある。

私は決意した。

このまま死ぬわけにはいかない。

## 探しめじょ「輪

「のまま死ぬわけにはいかない。

「そのいきそのいき~」

妙に甲高い声が頭からした。

よく見ると・・・。

「よつす~!

オイラは輪~。よりし~べ~。」

輪に田が付いてる。

「??.?..!..」

「まあまあ。

そう驚かないで」

驚くだる。

普通。

「これからはオイラが静枝をナビゲートするよ  
いきなり呼び捨て。

・・・ナビゲーター?

「じつこり」と~。」

「うそ。

静枝、これからは5つのものに近づいたらオイラがピカピカ光る

よ~。」

「ホント?~。」

「ホント」

ま、役に立つみたいだしげりか。

「早速だけど、反応してるよ」

「ええ?~!~嘘~。」

「ほんとほんと。」

すぐ近く！」

私は辺りを見渡した。

で。

お姉ちゃんを見たとき、輪がピカピカ光った。

「ホントだ」

「でしょ」

輪は誇らしげに言つた。

まじ凄い。

てかお姉ちゃん？！

何かあつたの？

「静枝のお姉ちゃん、美人だね」

「そ、そう？」

ま、確かに。

家のお姉ちゃんは結構モテてたし。

「ん・・・・？」

「どした？ 輪」

輪はマジマジとお姉ちゃんのお腹を見つめた。

「ああ――――――！」

「え？ なに？」

輪は急に叫んだ。

「静枝のお姉ちゃん・・・。

美波は妊娠してる――――！」

お姉ちゃんまで呼び捨て・・・。  
つて。

え――――――！

「に、妊娠？！」

「な、なんでわかんの？」

「だつて、オイラは生きている人も、死んでいる人も見分けられる  
んだよ。

そしたら、美波のお腹にもう一つの命が宿っているのが分かつた

んだ」

な、なんか凄い・・・。

そういうえば、お姉ちゃん最近体調悪そ'だつた。

「これはきっと、5つめの仲直りの為に作られたものだー」  
いきなり発見？

ラツキーなんだけど・・・。

「お姉ちゃん、私にそんな事言つてくれなかつたよ」

「そ'なの？」

輪は意外そうな声を出した。

「知らなかつた・・・」

なんか悲しい。

同じ家で暮らしてゐの・・・。

「・・・」

「静枝、大丈夫？」

「・・・うん。」

「ありがと・・・」

受け入れなくちや。

死んだ事もちゃんと受け入れられたんだから。

「それより、これからどうすんの？」

「とりあえず、美波についていこ」

「う、うん」

なんか尾行？ストーカーみたい。

「仲直りの為つてことは、お姉ちゃん誰かと喧嘩してたつて事だよ

ね？」

「そうだと思ひ」

「じゃあ、その原因を探つて、仲直りの為に作られたものを探せばいいの？」

「そうなるね」

「作られたものって・・・。

「赤ちゃん？」

「それは違うよ」

即答された。

私はムツとしながら、

「なんでそういう言い切れるの？」

「赤ちゃんって命があるんだよ？」

オイラ達が探しているのはもの！

命じゃなくてもの！」

輪に説教された。

ほんと生意氣。

輪のくせに。

「とりあえず、美波を見張りつ

「分かった」

私は不安だった。

これからどんな事があるんだろう。

全てを受け入れることができるかな？

でも。

受け入れなければいけないんだ。

決めたんだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5592z/>

---

奇妙な一週間。

2011年12月21日22時45分発行